

宝のわが子守るう

13日から防災月間

大船渡

NPO法人
こそだてシップ 乳幼児の親対象に

大船渡市のNPO法人・こそだてシップ(伊藤怜子理事長)は、独自に「幼い命をまもる防災月間(13〜28日)」を設け、集中的に乳幼児の親向けの啓発活動に取り組み、震災発生からあす11日で5年11カ月。当時子どもがいなかった親が増える中、教訓の風化を防ぐべく、本格的に防災活動に乗り出す。「すべては地域の宝である幼い命を守り抜くため」。期間中は、赤ちゃん用の備品の展示、防災紙芝居の読み聞かせ、動きやすいおんぶの仕方の指導などに当たる。

活動は、大船渡市盛 懐中電灯や電池、非常 トイッシュユやキュー町のサン・リア2階に 用口腔ケアのガムのは プタイプの子育用ミルクがある同法人運営の子育 か、お尻ふき用ウェットクなどを展示。備蓄品を支援センター「すくすくルーム」で行う。防災グッズとして、

集中的に啓発活動

をリスト化したチラシも配布し、地区別の避難所や津波浸水区域を示した津波ハザードマップを掲示する。

防災紙芝居の読み聞かせと、子どもが落ちにくいおんぶの仕方を伝える講習会は、毎日実施する。津波の写真集、震災を題材とした絵本も紹介する。

こそだてシップは、気仙の助産師有志らが立ち上げ、平成25年にNPO法人化。同ルームを拠点に育児支援を展開し、スタッフが地域に出向くサロン活動も手がけている。

乳幼児とその親に寄

13日から防災グッズの展示や防災紙芝居の読み聞かせなどを通じて啓発に当たるこそだてシップ・サン・リア内

すくすくルーム

り添う中で、構想を練ってきたのが防災の取り組み。災害弱者の妊産婦や乳幼児は、地域に助けを求める発信力が乏しく、同法人によると、震災直後、避難所の場所を知らなかったり、車がないため物資を取りに行けない親もいたという。次の親世代へ教訓を共有し合う場もなく、関心の低下が懸念されていた。

昨年11月には防災を初めて開いたが、単発の催しだと意識の浸透が十分といえず、継続的な啓発に踏み切った。今後は3月11日の前や9月の防災月間に合わせ、定期的の実施していく方針だ。

伊藤理事長(73)は「公的支援が届くまでは、親が子どもを守らなければならぬ。子育て世代以外の人も来て、多くの人が子どもの防災を考える場となる」と期待する。

同ルームの利用時間は午前10時から午後4時まで(水曜日は定休)。

